上社連研究

次期３か年の理論

すてきな笑顔と花のまち

ひがしかぐら

上川地区社会科教育連盟

http://kamisyaren.web.fc2.com/

上川地区社会科教育連盟研究主題

豊かな大地から社会を広げ，よりよい未来を追究する子どもの育成

確かな学びの中で，社会的な見方や考え方を高める学習を求めて

1　はじめに

上社連では，「北国から社会を見つめ，よりよい未来を追究する子どもの育成～確かな学びの中で『社会の中の自分』を見つける社会科学習の構築」を主題として，平成２２年度から３カ年の研究を進めてきました。

小中学生に対し，確実な実態の把握を行い，子どもたちの発達段階に合った学習過程や授業を構成することで「北国(ふるさと)」を正しく認識し，社会の一員である自分に気付かせることができました。

一方，社会科においては今までよりも一層，『社会的な見方や考え方』を成長させることが求められています。

前次研究において,『見方』を変えることはできたと確信していますが,『考え方』を高めることについては課題が残りました。

2　道社連研究とのかかわり

北海道社会科教育連盟は，平成２５年度からの新３ヵ年研究のテーマを『自ら参画し，たくましく生き抜く北国の子の育成～確かな「見方や考え方」を鍛える授業』と設定しました。

価値ある人の営みに触れたり，主体的に社会全体のことを考えさせたりする授業を通して困難な時代を生き抜く知恵を付け，判断力，行動力を育てていくことが今重要であるという考えに立ったのです。

たくましく「生き抜く力」は社会科のみならず，全教育活動を通じて育てるべきものですが，「公民的資質の基礎を養う」社会科の目標を踏まえた上で欠かすことのできない要素であると考えます。

3　上川で何ができるか

以上を踏まえ，上社連は新３か年研究主題を『豊かな大地から社会を広げ，よりよい未来を追究する子どもの育成』と設定しました。

北海道の中でも南北に広大で肥沃な土地をもつ上川地区。開拓時代から様々な生産活動や持続可能な未来に向けてのチャレンジが行われている地域です。

その中で生きる子どもたちだからこそ，地域の社会事象をしっかりと見つめ，認識させることが大切と考えました。

まず，地域を正しく認識し，価値のある人々の営みに触れさせ，その上で学習過程全体を通して育ててきた力を使い，他地域とのつながりや世界とのかかわりを考えさます。このような手順を踏むことで，学習過程当初に子どもたちが見つめてきた社会事象への見方や考え方を高めていきたいと考えました。

この経験が未来を生きる子どもたちにとって「持続可能な豊かな社会」について考える「種をまく」事につながり，ひいては「自信」や「誇り」をもってたくましく生き抜いていく力に結びついていくものと考えます。

1　研究主題および副題のおさえ

豊かな大地から社会を広げ

よりよい未来を追究する子どもの育成

南北３００キロ余りに広がる上川地区。

開拓当初から脈々と続けられてきた先人たちの努力によって，国内でも屈指の食糧基地として発展しました。

現在でも様々な分野で持続可能な未来を模索した価値ある人々の営みが繰り広げられています。

こうした地域の成り立ちや人の営みをもとに，地域を正しく理解し，その可能性や社会全体とのかかわりを積極的に子どもたちに伝えていくことが，今次研究でも引き続き重要であるという認識に立ちます。

一方，地域や身の回りの事象の学習に終始していては，その学びは，とても閉鎖的なものになってしまいます。

学習したことを公共の視点で考えたり，持続可能な社会の在り方を考えたりするなど，多面的にとらえなおすことで，子どもたちは自分ごととして考え，判断する力を養うこと，できると考えます。

うわべだけの知識の習得や否定的な判断だけでではなく，「自分の未来を逞しく追究する子ども」を育むことが求められると考えます。

確かな学びの中で

教師が子どもに指導する際，確実にその目標に到達させることが不可欠なのは言うまでもありません。しかしながら，ともすると教師の思いが強くなり，本来の目的を見失う実践があったのも事実です。

今次研究においても授業を構築する際は，目の前の子どもたちの実態をしっかり見つめ，つけたい力を思い描きながら，学習指導要領をしっかりと分析していきます。

何を，どこで，どのように身に付けさせていくのかを精査した上で授業に臨みます。

社会的な見方や考え方を高める学習

東日本大震災後，人と人とを結ぶ『絆』が見直されてきていますが，子どもたちにとって地域にある『社会事象』や，その中で日々繰り広げられている人々の営みは自分と離反した，「かかわり」が薄いものと捉えていたり，本質を理解するのに至っていなかったりするのが現実です。

そうした現状の中，子どもたちが成長し大人となっていく過程で社会事象をどうとらえ，どう考え，どう行動するかという実践力へとつなぐために社会科が果たすべき役割は小さくありません。

ですから学習過程においては，身に付けた知識を活用し，社会事象を多面的に見つめる場面を設定することが重要です。学習過程の後段では，学習過程前に見つめていた社会事象が広い『社会』の中でどのような意味や価値があるのかということを既習事項や今までの思考の流れからまとめさせ，社会的な見方や考え方を高めさせることを狙います。

2　研究の視点

研究の視点1
大地から社会へつなげる教材化

○子どもの実態把握とつけたい力の精査

○目標と身のまわりの事象との関連を精査

○豊かな大地に根付く人々の価値ある営みの教材化

研究の視点2
社会とのかかわりを深め，広げていく学習の構成

○知識を主体的に身に付けさせる学習過程

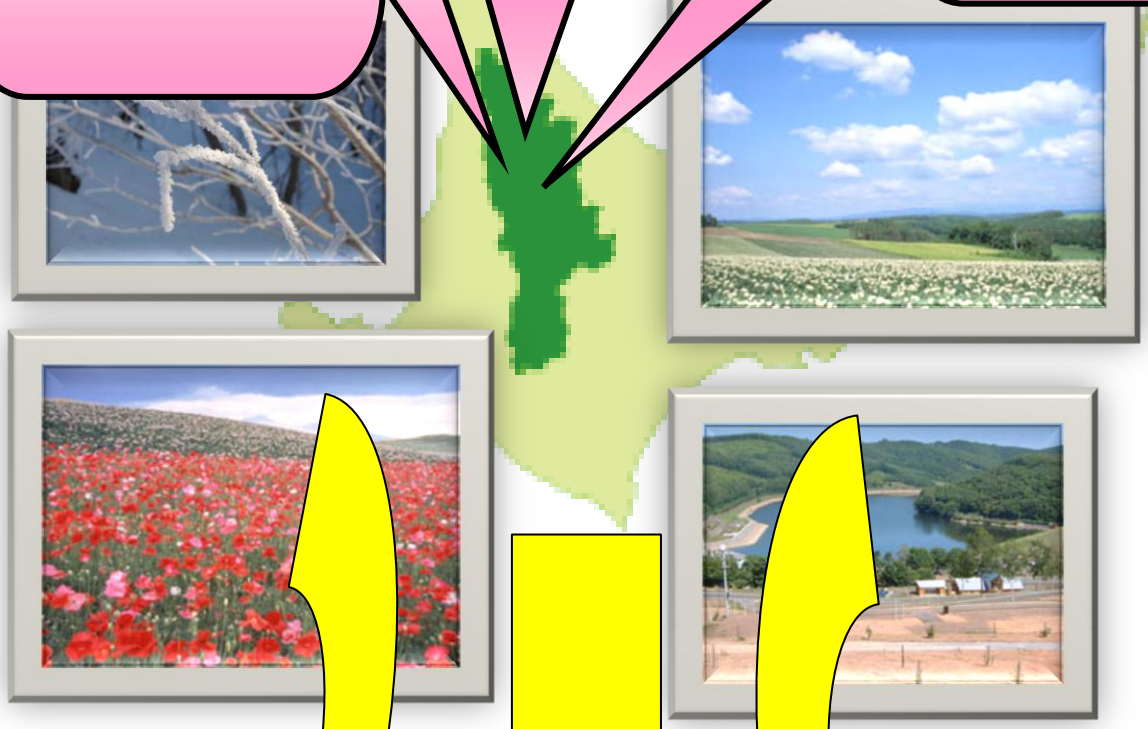
○身の回りの事象からよりよい未来へと見方や考え方を高める場の設定

研究の視点3
よりよい未来を追究させるための授業

○思考の足跡を残し，次時に生かすための方策の在り方

○多面的・多角的な価値を生み出すための問いや資料の吟味

○効果的な表現方法や交流のさせ方



豊かな大地から社会を広げ
よりよい未来を追究する子ども

研究の視点１
大地から未来へつなげる教材化

子どもの実態把握と，つけたい力の精査

上川地区は４市１６町２村を抱える広大な地域です。また南北に長い土地ゆえ，その産業や気候は多種多様です。

当然魅力のある人々の営みや社会事象もたくさんですが，上社連としては，いくら魅力のある事象であっても，それをすぐに教材化することは避けてきました。

子どもの実態と乖離していないか，目標との整合性はどうかということを長年吟味してきた歴史があります。

今次研究においても，授業づくりに際しては，子どもの実態をいかに把握し，用いる教材や学習の構成に，どう生かすかということを重視します。

目標と身のまわりの事象との関連を精査

授業づくりにあたっては，当然のことながら指導要領の正確な分析が欠かせません。教材化に当たっては，その学習過程でどのような姿を求めているのか，そのために具体的に取り扱わなくてはいけないことは何かを丁寧に分析します。

その上で目標や扱う内容が上川で生きる子どもたちの身の回りの事象とどのように関連しているのかを洗い出します。ここで言う関連とはやみくもに地域教材を扱うことを意味するのではなく，時間的，空間的な広がりを含めたものと押さえます。

目標と子どもの身の回りの事象との関連を明らかにすることで，つけるべき力を確実に身に付けさせ，かつ学びを自分ごとにさせることが可能と考えます。さらに，授業においては，学習過程において目指す子どもの姿や具体の評価規準を設定し，それらを生かした手立てを明示しながら指導改善に努めます。

○豊かな大地に根付く人々の価値ある営みの教材化

教材化にあたっては，これまでも「北の可能性」を内在した物や，社会に貢献し積極的にチャレンジする地域の人物の営みに絞り込む教材化を行ってきました。また，教材の魅力ありきではなく，社会科における価値や子どもたちへの伝え方を意識しながら教材化を行ってきました。

ここ数年「持続可能な社会」という言葉が見られるようになりましたが，今後持続可能な社会を形成していくのは子ども自身。そのためにはまず，身の回りの事象を正しく認識することが重要です。その上で，より広い社会とのつながりを意識し，見方や考え方を高めさせることができます。

今次研究においても今まで大切にしてきたことを踏襲し，子どもの実態と学習指導要領の分析を入念に行ったうえで『大地』発の教材化にチャレンジしていきます。

研究の視点２
社会とのかかわりを深め，広げていく学習の構成

○知識を主体的に身に付けさせる学習過程

学習過程の終末で，子どもたちに多面的・多角的な視点で考えさせたり，自分の言葉で表現させたりするためには，前提となる知識や技能の習得が不可欠です。

そのために，学習過程の前半部分（たとえば共通課題や個人課題の解決までの過程）では，「何時間目」に「何を」指導するのかを明確に位置づけることで，計画的に知識や技能の習得を図ります。

一方では，習得の意味，必然性をもたせることも重要です。身に付けた知識を生かして考えたり，判断したり，あるいはグラフに表現したりという活用する場面を学習過程に組み込むことが大切です。

また学習過程全体に，自分の学びを振り返ったり，友達と交流したりする場を意図的に組み込むことで，「何がわかり，何が足りないのか」を子どもに自覚させることが可能となります。このことが学ぶことの面白さを実感する事につながり，主体的に解決に向かう子どもを育てることが可能と考えます。

○身の回りの事象からよりよい未来へと見方や考え方を高める場の設定

学習過程の後半においては，共通課題の解決に納得させるだけでなく，今まで学んできたことを基にして，新たな視点で社会事象について考えさせる時間を意図的に設定します。

複数の視点を与えることで，今まで一つの側面で認識してきた社会事象に対し，新たな社会的価値があることに気づかせたり，他の社会事象との関連を考えさせたりすることを狙います。

また，最終時においては，学習過程の後半で考えてきたことを関連させる場面を組み入れることで，学習前に見つめていた社会的事象に対しての見方や考え方を高める場面を設定します。

社会科学習における探究の方向として重要なのは，とりあげた人間の営みや社会事象の意味や価値を追究したり，自分とのつながりを考えさせたりすることです。

それまでの追究の視点を見つめなおし，社会事象相互の関係を思考させることで，子どもたちにとっては，学習内容がより自分の内面に迫ってくるものになります。

同時に，自分から空間的，時間的に遠い場所の事象であっても，自分ごととしてとらえることが可能になり，そのことが，よりよい未来への追究につながるものと考えます。

研究の視点３
よりよい未来を追究させるための授業とは

○思考の足跡を残し，次時に生かすための方策

上社連が，子どもたちに身の回りの社会事象を正しく理解させながら，徐々に見つめる世界を広げ，よりよい未来を追究させていくことを狙っていることは先に述べました。

授業レベルで毎時間大切にしたいと考えているのは，「その時間で何を考え」「何がわかったのか」という足跡を残すことです。

長い学習過程の中で，もし自分の追究の方向を見失った時，その足跡をたどることで修正することが可能になります。また，足跡を基に自らの思考の道筋を振り返ったり，友達と追究の方向を検討したりなどすることで，自分の学びを客観的に見つめることができると考えます。

また，複数の社会事象と関連させて新たな価値づけをさせたり判断させたりする時には，今までの思考がその礎となるのは間違いありません。

今次研究においては，各部会で，授業で思考の足跡を残し，それをどう次時に生かすかということにチャレンジしていきます。

○多面的・多角的な価値を生み出すための問いや資料の吟味

よりよい未来を追究させるためには，一つの社会事象を深く追究するだけでは目的を十分に達成させることはできません。自らと事象との関わりはもちろんのこと，広い視点で社会事象を見つめ直し，既習事項と関連付けて新たな価値や意味を考えさせることが必要です。

そのために最終時に，今まで触れてきた社会的事象を多面的にとらえさせるための資料や問いを提示し，今までの見方や考え方を高めさせることを狙います。

社会事象をいろいろな要素や関係性から見つめ直すことにより，新たな価値創造や判断をうみだすことができ，よりよい未来を求めて行動するための種をまくことにつながると考えます。

当然のことながら各学年による発達段階の違いや分野別の違いがあるので，何のためにその資料や問いを提示するのかということは，実態と目標を照らし合わせながらベストと思われるものを提示していきます。

○効果的な表現方法や交流のさせ方

追究活動を行ってきた子どもたちに十分保障したいのは，考えを表現する場をしっかり設けることです。簡単なことのように思えますが,，その保障があって初めて子どもたちは，意思決定したことを表明する意欲が高まると考えます。

授業の流れを十分検討し，子どもたちが意見交流に浸れる場をどのように，どのタイミングで設定するのかを十分吟味します。

また，各自が考えを表現する際にどのような表現方法や交流のさせ方が効果的であるかということについても部会ごとに考え，よりよいものを追い求めていきます。